

たぶんかひと  
多文化人①

ジャスティン トビアスさん

にほん き じぶんじしん  
日本で気づいた自分自身  
きょうみ かんしん  
興味、関心、やりたいことは尽きません

「鹿の遠音」\*という曲を満足に吹けたら、尺八はやめてもいいと思っ  
ています(笑)。始めて7年になり  
ますが、目標ははるかかなたです。  
毎日の練習あるのみですね。

尺八を知ったのは、オーストラリア

のテレビ番組。羽織袴を着た先生が  
ひとり、道場で尺八を吹いていました。  
見たことのない姿、聞いたことのない  
音…日本に来てからもその映像が  
ずっと頭の中に残っていました。

尺八を習い始めるのは、大変だっ  
たんですよ。まず、誰に聞いて  
も尺八の売っているところを  
知らない。知り合いの紹介で  
なんとか尺八は手に入れたけ  
れど、持ち方も吹き方もわか  
らない。半年間はただ「フー」  
と息が通るだけで音すら出  
ません。これではダメだと、  
先生を探しだし、習い始めて  
やっと音を出せるようになった  
んです。

尺八は8世紀ごろ中国か  
ら日本に伝わり、後に虚無僧  
(笠をかぶり、尺八を吹く  
修行僧)が吹いていたもの。

精神的な訓練・修行のための仏具と  
して使用されていました。ひとつの  
音だけをひたすら吹いていると、頭  
が少しずつその音に集中していくの  
を感じます。虚無僧もそのように  
修行していたのかもしれないね。

僕は、日本に来て尺八だけでなく  
茶道、陶芸、書道などいろんなこと  
をやってみました。日本文化に関心  
を持ったきっかけは、大学で学んで  
いた応用物理学と禅には共通点があ  
ると知ったことです。それまでまっ  
たく知らなかった禅について調べて  
いるうちに、いつの間にかすっかり  
ハマっていたんです。そして、留学し  
た山梨大学で、禅の授業を受けたり、  
お寺の座禅会に参加したり。すると、  
関心はどんどん広がり、あれもこれ  
も知りたくなって、試してみたくなっ  
たんです。

僕の知りたいという意欲や日本人  
の母に似た性格が、日本の文化や  
考え方を受け入れるのにぴったり  
だったのだと思います。でも、それ  
は留学してから気づいたこと。日本  
で知った新しい自分だったんです。  
国内にいと気が付かないことも



あります。今、僕は海外に留学す  
る大学生をサポートしていますが、  
学生には世界の空気を吸って、いろ  
んなことを体感してほしい。そして、  
興味があることが見つかったらとこ  
ん突きつめてほしい。なんでもい  
いんです。失敗してもいい。そこか  
ら考えることで、学べることもある  
んです。

\*尺八の曲の中で、最も有名なもののひとつ。秋  
の山で、2匹の鹿が呼び合う様子を表現した曲。

プロフィール

北陸大学国際交流センター職員。  
オーストラリア・シドニー出身、ハ  
ンガリー人の父と日本人の母の間  
に生まれる。2000年山梨大学に  
交換留学生として来日。趣味は、  
尺八、茶道、書道など。最近ハマっ  
ているのはロードバイク。100キロ  
近くの距離を4時間ほどかけて走  
るのが週末の楽しみ。金沢市在住。

多文化人②

スザーン ロスさん

入門までに6年間。私を夢中にさせる  
輪島塗のすばらしさを日本人にも伝えたい

ガタコと長い時間電車に揺られながら、ようやく夜の輪島に着いたとき、目の前に現れた風景に私はおどろきました。辺りは真っ暗で静まり、人がいる気配もない。当然、英語がわかる人もいない。なんて所に来てしまったんだろうと思いました。私が住んでいたのはイギリス(英国)のロンドン。町はとっても賑やかで、夜はオペラ(観劇)やレストランでお食事、大きな美術館もた



くさんある大都会。あまりの違いに最初はショックを受けましたが、気がつけば輪島に住んで21年が経ちました。

漆と出会ったのは、イギリスで彫刻や美術を学んでいた大学生の時。授業でしぐしぶ行った展覧会に、日本画の屏風と漆塗りのすずり箱があったんです。「あの空間を仕切る変わった家具を、漆でつくったらおもしろいだろうな」と考え、漆の勉強を3か月ほどしてきょうと気軽に日本にやってきたんです。それが、輪島で弟子入りをお願いしたところ、「女性は受け入れたことがない」「もっと日本語を勉強してこい!」と門前払い。さらに、輪島塗には100工程以上あり、一つの工程を身につけるのに3年はかかると言われたんです。ショックでしたね。300歳になっちゃいますよ

ね(笑)。漆塗りを本格的に学び始めるまでに6年かかりました。それでも習いかけたのは、輪島塗のすばらしさと可能性にどんどん夢中になっていったからです。

私は輪島塗のすべての工程を自分

ひとりで行っています。私の作品の特徴は、母国イギリスと日本の文化の融合。イギリスの銀食器と輪島塗の特徴をあわせ持ったお皿やヨーロッパのレース模様をあしらった器などです。常にいろんなことを試しているんですよ。例えば、漆を葉っぱや海藻、石にぬってみたり、作品にも貝や卵の殻などを使用します。

私は日本人じゃないからこそ、伝統にしばられない自由な発想を取り入れることができたんでしょうね。日本文化のよいところは、相手の気持ちをお互いに大切にする心。そこから学び、私は80%までしか作品



を完成させないんです。使う人がそこにお菓子をのせるなど、使われて初めて、作品として100%完成するように制作します。輪島塗という伝統的なものづくりの文化を通して、人を思いやる心や優しさを感じてもらいたいですね。

プロフィール

漆芸作家・デザイナー。イギリス・ロンドン出身。改装した古い牛小屋を作業場として日々散歩を楽しみ、大自然を感じながら、作品へのイメージをふくらませます。趣味は水泳、ヨガ、芸術鑑賞。2人の娘さんのお母さんでもある。輪島市在住。



たぶんかびと  
多文化人③

みなこ  
サバルサ ヘイカプア 美奈子さん

ちきゅうじん  
ひとりの「地球人」として、  
タヒチアンダンスをおどっています

わたしは4歳のときに日本舞踊を始めました。しばらく舞台から遠ざかっていた時期もありましたが、東京で英会話の講師をしていた頃、自分を見つめなおそうと思って日本舞踊を再開しました。でも私が探しているものは、日本舞踊の中には見つからなかったんです。

「わたしに合う“おどり”がどこかにあるはず」。そう考えた私は20代後半で仕事をやめ、世界各地の伝統的なおどりを見に行きました。そして南太平洋に浮かぶタヒチ島に伝わる情熱的なおどり、「タヒチアンダンス」の魅力にとりつかれたんです。

そもそも、“おどり”というものは、人間が草花を身につけ、木や石を打ち鳴らし、思いのままに体を動かしたときに生まれたものです。タヒチアンダンスには、そんな人間の本能的なパワーが感じられました。

タヒチアンダンスがおどりたくて、いてもたってもいられなくなった私は、ハワイ在住の有名なベレイラ・ローズ先生に頼みこんで指導を受けました。「ヘイカプア」という名前は、数年間修行をした後に、ローズ先生にいただいたタヒチ名なんです。

「日本人なのに、なぜタヒチアンダンスなのですか？」と、海外で新聞記者に聞かれたことがあります。私はこう答えました。「おどりは国や文化が成り立つずっと前からありました。私は国境や文化を超えて、ひとりの地球人として、一日中でもタヒチ



アンダンスをおどっていたいんです」って。そしたら、その言葉が次の日の新聞に大きく載ったんです(笑)。

“おどり”というと、目立ちたいからする、健康にいいからする、と考える人も少なくありません。でも本来、おどりは人間にとって欠かせないものはず。中でもタヒチアンダンスは、私にとって自分自身を表現する大切な手段なのです。ですから、子どもたちにこのおどりを教えている今も、異文化を広めているという意識はありません。

たいかい 発表会で、子どもたちのキラキラした横顔や、感動して涙を浮

かべている観客のみなさんの様子を目にすると、タヒチアンダンスを通して世界中のたくさんの人びとに出会えたことに、感謝の気持ちがわきあがります。子どもたちには、おどりの技術とともに、夢を本気で追いかける強い生き方を伝えたいですね。

プロフィール

タヒチアンダンス教室「ティアレヘイプア」(小松市矢田野町)代表  
サバルサさんは、小松市をはじめ県内各地でタヒチアンダンスを教えています。ティアレヘイプアは、世界大会の団体部門で3年続けて優勝しています。小松市在住。

たぶんかびと  
多文化人④

いけざき ゆういち  
池崎 雄一さん

## 血が騒ぐほど夢中になれることが 地球の裏側にあったんです

前世はブラジル人じゃないかと思うくらい、カポエイラをしていると血が騒ぐんです。音楽によって歌い、リズムに合わせて手拍子を打つ。身体全部を使って楽しさやうれしさを表現できることが最大の魅力。

“僕は生きている” そう実感できるんです。

カポエイラとは、16世紀頃アフリカから奴隷として連れて来られた黒人たちによって生み出された、ブラジルの伝統的な格闘技です。蹴り技が中心ですが、相手を倒して勝負を決めるものではありません。ゲームを行なう2人のプレイヤーを囲んで、人びとが打楽器と手拍子のリズムに合わせて歌います。伝統的な歌や歴史を伝える歌もありますが、雰囲気に合わせてその場で歌を作るんですよ。ダンスのようにしなやかな動きや逆立ちからの攻撃、アクロバティッ

クな動きに、人びとも大いに盛り上がります。相手をだましたり、笑わせたりする表現もカポエイラのおもしろさ。技があたっていなくても、受けた方は「あたってー！」と痛そうな演技をするんです。

音楽バンドや空手、ダンスに興味があった高校生の時、テレビでカポエイラを知り、「これだ!」と感じました。専門学校卒業後、お金をためてブラジルに渡り、カポエイラ発祥の地パイア州で道場に住み込んで学びました。そこで多くのカポエイラ仲間や友だちができました。中には、貧しくて小さな家に大家族で暮らしている友人もいました。しかし、彼らは決して悲しそうではなく、よく笑い、いつでもおどり、どこでも歌う。家族や友人を大切に、自分の好きなことも楽しみます。物やお金がないからこそ、本当に大切なものが何なのかを知っているようでした。そういう人間らしさとポジティブな心の持ち方を学んだんです。

「このすばらしいブラジルの文化を多くの人に伝えたい」 そう思った僕は、日本で教室を開きました。カ



ポエイラを習うことで、自分の感情に素直になり、豊かな表現力を身につけてほしいと思います。生徒たちはみんな、ポルトガル語でカポエイラのうたを歌えるんですよ。あいさつや礼儀、靴をそろえることなど、日本の美しい習慣も忘れることなく、外国の文化の良さも学んでくれるとうれしいですね。カポエイラを金沢から全国にひろげていくこと。これが僕の目標です。

### プロフィール

文化連盟ゲトカポエイラ日本支部代表。階級は、先生にあたるプロフェッショナル。教室で老若男女約100人の生徒にカポエイラを教えつつ、自らもブラジルに行って技術を磨く。趣味はサンバヘギ。スルドという太鼓をたたきながら歌い踊る、ブラジル・パイア州伝統のサンバとレゲエを組み合わせた音楽。金沢市在住。

